

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19730100
 研究課題名（和文） アジア主義とインド——来日インド人とアジア主義者の思想連鎖・ネットワーク
 研究課題名（英文） Pan-Asiaism and India.

研究代表者

中島 岳志（NAKAJIMA TAKESHI）
 北海道大学・大学院公共政策学連携研究部・准教授
 研究者番号：40447040

研究成果の概要：近代日本のアジア主義とインドの関係を、戦前・戦後に来日したインド人思想家・法律家の思想と行動を中心に論じた。特に、ラーダービノード・パールとラビンドラナード・タゴールについて論じ、近代日本のアジア主義者たちが、彼らとの間でどのような思想的連関および衝突を引き起こしたかについて明示した。そして、この具体的事例を元に、日本のアジア主義の特質について議論を展開した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	0	1,600,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,900,000	390,000	3,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：アジア主義、インド、パール判決書、タゴール、ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

近代日本のアジア主義とインドの関係を、来日したインド人思想家・活動家と日本人の具体的な関わりから考察し、そこで構築された思想的連関・人的ネットワークを明らかにすることを目指した。

先行研究では「(1) アジア主義の問題を概ね日本および東アジア世界に限定しているという空間的問題」、及び「(2) アジア主義を 1945 年以前のものに限定しているという時間的問題」があった。そこでは、東アジア以西（例えば南アジアや中東、中央アジア）におけるアジア主義運動や「Alternative

Modernity」の可能性を追求した非西洋主義の潮流、反植民地独立運動などとの連携及び摩擦は詳細に論じられず、また、戦前と戦後が断絶して論じられているため、その政治的・思想的連続性の問題も等閑視されていた。

そのため本研究では、戦前期の東アジア世界に限定されて議論されることが多かったアジア主義論を(1)「インドにまで拡張」し、

(2)「1945 年以前・以後の思想的連続性を捉えること」で、新しいアジア主義の見方を提示することを目指した。

2. 研究の目的

本研究では、上記の課題を踏まえ、日本で活躍した複数のインド人思想家・活動家を取り上げた。そのことによって、アジア主義の空間的・時間的限定性を乗り越え、さらにインド人の思想家・活動家と日本人思想家との思想的相互連関を明らかにすることを目的とした。

具体的には、まず極東軍事裁判（東京裁判）に判事として出廷し、A 級戦犯に対して「無罪」の見解を示したことで知られる Radhabinod Pal（ラーダービノード・パール：1886－1967）の伝記的研究を進めた。ここでは、パールのインドにおける法学者としての活動及びその思想を明らかにし、その視点から「パール判決書」を位置づけ直すことを目指した。また、「パール判決書」の精読を行うことを通じて、彼が東京裁判において展開した法理論、およびそこで展開された歴史認識、文明観、世界構想について分析を進めた。さらに、彼が東京裁判後に展開した世界連邦運動の具体的内容と日本のアジア主義者たちとの思想的連関・連鎖を明らかにし、政治状況によって左右されやすいパールの実像を実証主義的に提示することを試みた。

次に、アジア初のノーベル文学賞受賞者である詩人・思想家 Rabindranad Tagor（ラビンドラナード・タゴール：1861－1941）と近代日本の関係についての研究を進めた。ここでは、外務省外交史料館所蔵の外交文書の収集・分析によってタゴールの足取りと日本政府の反応を明らかにすると共に、全国各地の図書館での新聞・雑誌の調査に基づき、日本におけるタゴール論の系譜を提示した。ここでは、特に 1916 年の来日問題を取り上げ、そこで生じた日本の知識人たちとタゴールの思想的すれ違いに注目し、日本人のオリエンタリズムと帝国主義の問題を論じた。また、タゴールの日本観が滞在中に変化していくプロセスを明示し、アジア主義におけるタゴール来日の意義について論じた。

3. 研究の方法

特に日本国内およびインドにおける文献収集を中心に研究を行った。その際には、特に国立図書館、東京大学総合図書館、外務省外交史料館、パール下中記念館、カルカッタ大学図書館、フェデレーション・ホール（コルカ）、インド国立文書館（ニューデリー）を利用した。

4. 研究成果

主な成果として、『パール判事——東京裁判批判と絶対平和主義』（白水社、2007 年）と「タゴール、現る——大正初期の「タゴール熱」と初来日を巡って——」『大倉山論集』55 号（2009 年 3 月）を公表した。

前者では、パールの伝記的研究およびパー

ル判決書の分析、彼の思想体系について詳述した。

ここでは、パールがインドにおいて展開していた古代ヒンドゥー法の研究と彼の宗教思想、そして法理論がいかなる関係を持っているかを論じた。

また、彼の東京裁判における意見書が、「平和に対する罪」および「人道に対する罪」については事後法であり、罪刑法定主義に反するとして「裁判所の管轄外」としたのに対し、「通例の戦争犯罪」については、それを裁判にかける意義を認めた上で、指導者責任に問われた A 級戦犯容疑者に対し証拠不十分との理由で「無罪」判決を下したことを明示した。

さらに、パールの思想がガンディーの非暴力主義・絶対平和主義に大きく影響を受けている点を指摘し、その思想と世界連邦主義が呼応していることを明らかにした。そして、このような思想的背景から、1950 年代に日本を再訪したパールが、日本の再軍備を厳しく批判し、絶対平和主義を貫くべきことを主張した経緯を詳述した。

このような個別的分析を通じて、パール判決書を「日本無罪論」と位置づけることの問題点を指摘し、歴史修正主義者のパール認識に異論を唱えた。

一方、後者においては、まず 1915 年に生じた「タゴール・ブーム」について、その概要を示した。そして、このブームが大正初期におけるオイケン・ベルグソン・ブームから連続して起ったものであることを明示し、大正生命主義との関係性について論じた。

次に、タゴールが来日（1916 年）に際して、どのような目的意識をもっていたかについて分析を進めた。また、日本側がタゴールに対して、いかなる期待を持って来日を迎えたかを明示した。

そして、タゴール来日中に生じた日本側のタゴール認識の変化とその問題について論じた。具体的には、タゴール来日初期においてはオリエンタリズムの礼賛が圧倒的な力を持ったことに対し、その滞在中にタゴールの日本に対する批判的視点が明らかになるにしたがって、タゴールへのバッシングが急激に巻き起こったプロセスを明らかにした。そして、そのオリエンタリズムの礼賛とタゴールバッシングの論理が、コインの裏表の関係であることを論じた。

この二人のインド人の来日問題を論じることによって、アジア主義全般および日本の国家主義・右翼運動への新たな視点を獲得し、それらを包括的に論じる試みをさまざまな場所で展開した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文] (計 26 件)

1. 中島岳志「アジア主義、その思想と系譜」原武史【編】『政治思想の現在』(河出書房新社)、2009 発表予定、査読無
2. 中島岳志「宗教ナショナリズムとコミュニズム」田中雅一・田辺明生【編】『南アジア社会を学ぶ人のために』(世界思想社)、2009 発表予定、査読無
3. 中島岳志「アジア主義とナショナリズム」『アジアが生み出す世界像——竹内好が残したもの』(SURE)、P.16-63、2009、査読無
4. 中島岳志「20 世紀初頭のインド熱——堀至徳のインド留学」小川原正道【編】『近代日本の仏教者の中国・インド体験』(DTP 出版)、P.89-101、2009、査読無
5. 中島岳志「[解説] 山内昌之【著】『スルタンガリエフの夢』(岩波書店 岩波現代文庫)」山内昌之【著】『スルタンガリエフの夢』(岩波書店)、P.425-432、2009、査読無
6. 中島岳志「タゴール、現る——大正初期の「タゴール熱」と初来日を巡って——」大倉山論集 55 号、P.221-261、2009、査読無
7. 中島岳志「マハトマ・ガンディー」中島岳志・北康利『NHK 知るを楽しむ 私のこだわり人物伝 (2008 年 12 月 - 2009 年 1 月)』(日本放送出版協会) P.6-88、2008、査読無
8. 松本健一・中島岳志「中国とインドは『近代の超克』の轍を踏むか」中央公論 123 巻 9 号、P.132-141、2008、査読無
9. 中島岳志「アジア主義の歴史的系譜」論座 160 号、P.86-89、2008、査読無
10. 中島岳志「アジアの隣人インドとの向き合い方」潮 2008 年 7 月号、P.98-103、2008、査読無
11. G. M. ナイル・中島岳志「東京のインド史を歩く——もうひとつのインド独立運動をたどって」カイラス 2 号、P.104-108、2008、査読無
12. 中島岳志「日本右翼再考——その思想と系譜をめぐって」思想地図 1 号、P.63-86、2008、査読無
13. 中島岳志「政治と宗教——宗教の脱私事化と公共圏」辻康夫、松浦正孝、宮本太郎【編著】『政治学のエッセンシャルズ』(北海道大学出版会)、P.114-123、2008、査読無
14. 中島岳志「アジア主義——その可能性の中心」辻康夫、松浦正孝、宮本太郎【編著】『政治学のエッセンシャルズ』(北海道大学出版会)、P.165-180、2008、査読無
15. 中島岳志「保守とナショナリズム」アジア時報 433 号、P.4-29、2008、査読無
16. 中島岳志「[書評] 大澤真幸【著】『ナショナリズムの由来』(講談社)」論座 151 号、P.207-208、2007、査読無
17. 中島岳志「解説」大岡昇平【著】『ながい旅』(角川文庫)、P.317-325、2007、査読無
18. 中島岳志「思想の場所①——銀座」春風目録新聞 1 号、P.2-2、2007、査読無
19. 中島岳志「[書評] 橋川文三【著】『ナショナリズム』(紀伊國屋書店)」scripta2007 年秋号、P.47-48、2007、査読無
20. 中島岳志「[書評] 竹内好【著】『日本とアジア』(ちくま学芸文庫)」中央公論 122 巻 9 号、P.205-205、2007、査読無
21. 中島岳志「川内康範と昭和の情念——任侠・正義・平和憲法」図書 702 号、P.22-25、2007、査読無
22. 中島岳志「小林秀雄と伝統への意思」学士会会報 865 号、P.118-122、2007、査読無
23. 中島岳志「思想と物語を失った保守と右翼」論座 146 号、P.47-54、2007、査読無
24. 中島岳志「岸田『国土』——大政翼賛会という眩暈」NYLON100 °C 30th SESSION 犬は鎖につなぐべからず——岸田國士一幕劇コレクション(シリーズウオーク)、P.40-41、2007、査読無
25. 中島岳志「解説：平等と幸福を探求した昭和維新」橋川文三【著】『昭和維新試論』(ちくま学芸文庫)、P.277-286、2007、査読無
26. 中島岳志「インド人のまなざし、インド人へのまなざし——近代日本における「印度」の位相」鈴木正崇【編】『東アジアの近代と日本』(慶應義塾大学東アジア研究所)、P.409-448、2007、査読無

[学会発表] (計 4 件)

1. 中島岳志「アジア主義の系譜」シンポジウム「比較の中の EU——アジア主義との交錯——」、2008 年 6 月 14 日北海道大学
2. 中島岳志「日本右翼の思想と系譜」東京大学先端科学研究所セミナー、2008 年 3 月 5 日東京大学
3. 中島岳志「戦後日本の革新ナショナリズムとインド研究」日本南アジア学会全国大会、2007 年 10 月 6 日大阪市立大学
4. 中島岳志「パール判事——東京裁判批判と絶対平和主義」北海道大学法学会・政治学研究会、2007 年 4 月 26 日北海道大学

[図書] (計 6 件)

1. 中島岳志・西部邁【著】『講談社現代新

- 書 パール判決を問い直す——日本無罪論の真相』(講談社)、P.1-206、2008
2. 姜尚中・中島岳志【著】『日本——根拠地からの問い』(毎日新聞社)、P.1-219、2008
 3. 樋口哲子【著】中島岳志【編】『父ボース——追憶の中のアジアと日本』(白水社)、P.1-211、2008
 4. 西部邁・中島岳志【著】『保守問答』(講談社) P.1-303、2008
 5. 大川周明【著】中島岳志【編・解説】『頭山満と近代日本』(春風社)、P.1-211、2007
 6. 中島岳志『パール判事——東京裁判批判と絶対平和主義』(白水社)、P.1-309、2007

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中島 岳志 (NAKAJIMA TAKESHI)
北海道大学・大学院公共政策学連携研究部・准教授
研究者番号：40447040

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし